

## 第2回近世社寺建築研究集会

建造物研究室

第2回近世社寺建築研究集会は、昭和63年11月24・25日の両日、奈良国立文化財研究所講堂において開催された。建築史研究者・文化財建造物修理技術者・文化財保護行政担当者など約120名が参加した。

昭和62年の第1回の集会では、各宗派毎、あるいは各地域毎に近世社寺建築の主として平面的な特質を解明することを目途として多くの成果を得た。今回は、それを踏まえて近世社寺建築の造営を支えた背景を明らかにするべく、工匠の組織・活動、造営に係わる諸問題について検討を加えることとした。

第1日は、まず浅野清氏による講演「近世社寺の特質」があり、短いながらも近世社寺建築の特質を把握する要点が提示された。次に細見啓三が「各地における工匠の活動」と題する報告を行い、近世社寺建築緊急調査報告書から知られる各地の主要な大工・大工団体の活動事例が整理された。工匠の実態をより具体的に知るべく、岡山県（細見）・滋賀県（山岸）の事例紹介があり、参加者からも長野（吉沢政己）・九州（佐藤正彦）・関東（荒井朝江）の紹介があった。その後これらの報告をふまえて討議が行われ、棟札の調査法・記載内容、工匠の活動の事例、工匠の関与する範囲や費用と作品の関係、等について意見が交わされた。

第2日は、上野邦一から「調査資料のデータ化について」の報告があった。これは第1回の集会以後に近世社寺建築緊急調査報告書所収の遺構を効率的に整理するために構築したデータベースの概要の紹介である。同様の作業は文化庁建造物課・国立歴史民俗博物館・長野県史刊行会でも行われており、各々の概要を後藤治・濱島正士・吉沢政己氏に紹介していただいた。

続いて、近世仏教史が御専門の圭室文雄氏から「江戸幕府の宗教政策—寺請制度を中心として—」と題する講演があり、近世初頭の寺院の成立状況、それを幕府が把握し民衆を統括してゆく過程、そこでの寺院の役割等が明快に語られた。次に「近世社寺建築の作事形態」をテーマとする研究会に移り、櫻井敏雄氏を司会として、伊東龍一（北関東の彫刻大工）・田中徳英（加賀藩における造営組織）・谷直樹（畿内の大工組と作事）・西和夫（請負制度の発達）の4氏からの発表があり、これをふまえて討論に移った。工匠の職務範囲・地理的活動範囲、彫物大工の職務とその作風、大工組の制度の実態と畿内以外での状況などについて議論が行われた。

議論を通じて、地方による造営組織の差異、史料から知られる造営の実態と現存遺構や棟札から知られるそれとの対比など、研究すべき課題がなお少なくないことが明らかになった。

翌26日は談山神社・長谷寺・岡寺の近世社寺建築及び修理現場の見学会を開催した。なお、第1回及び今回の研究集会の記録は、『近世社寺建築の研究』第1号・第2号（昭和63年7月・平成2年3月）として出版している。

（山岸 常人）